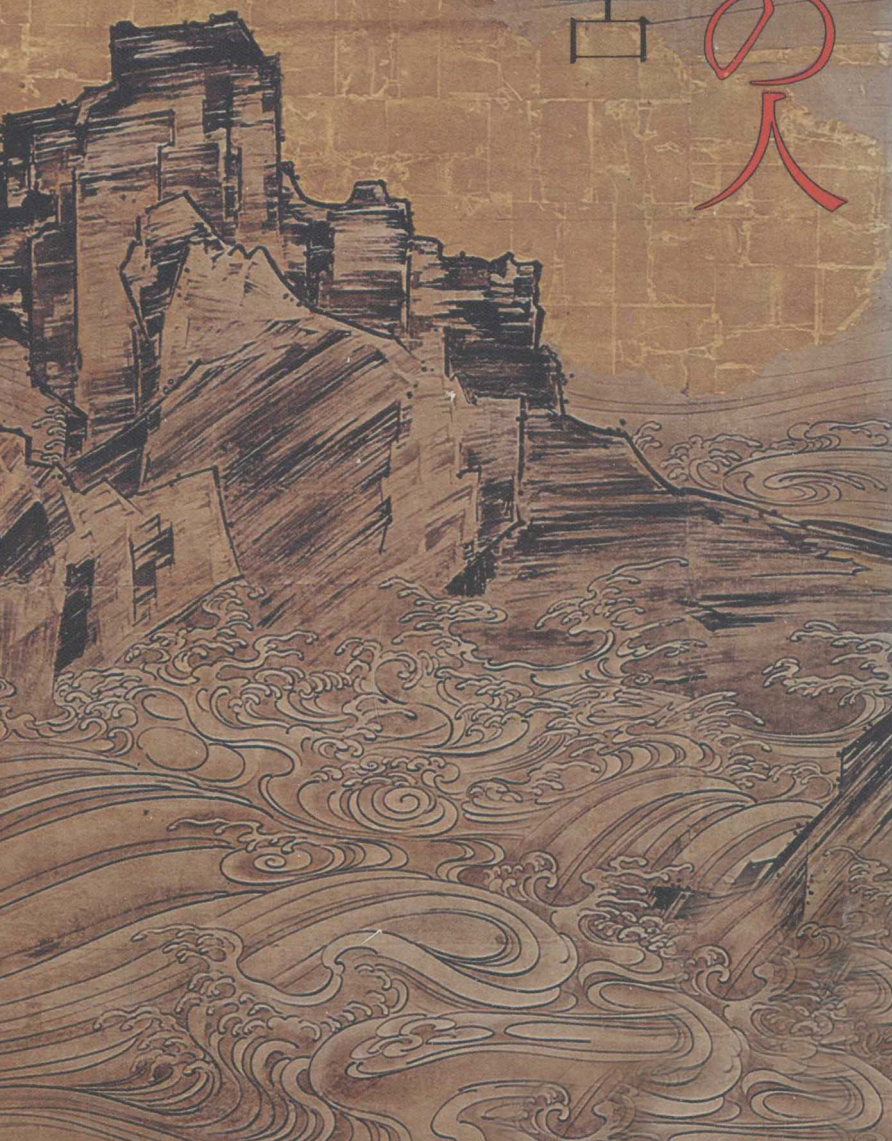


移郷の人  
岡本好古



移郷の人

岡本好吉

著者略歴

昭和46年10月、得意の想像力を駆使した「空母プロメテウス」で選考委員の絶賛を得て、第17回小説現代新人賞を受賞し、文壇に華々しくデビュー。以後、機械と人間をテーマに続々と作品を発表、最近では題材を東アジアに求めた作品、歴史小説等、異色のテーマにも挑戦している。

昭和5年京都生まれ。同志社大学中退。

現住所 京都市左京区北白川久保田町60

著書 「空母プロメテウス」「巨船」「仰ぎ見れば蒼い空」「悲将ロシメル」「登龍門」「日本海海戦」

移郷の人

第1刷 昭和51年7月28日発行

著者 岡本好古（おかもと・よしふる）

発行所 株式会社 講談社・発行者 野間省一

〒112 東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(03)945-1111(大代表) 振替東京813930

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

©1976 YOSHIFURU OKAMOTO Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります

(文2)

移  
郷  
の  
人

装幀 安彦勝博

カバー装画 「波濤図」(伝 長谷川等伯筆 禅林寺蔵)

# 一章

春秋戦国時代と呼称されて十世紀を生きながらえた周朝末期、赧王たんのうの四十七年——今より二千三百年前である。徐劔じょけん英は山東半島の喉首にある小都市、琅邪ろうげに到りついた。

彼は遠く西方の趙の宮廷でかなりの要職の武人だったが、あるきっかけで身を退き、長い放浪のはてにこの齊の国に到りついたものである。琅邪の入江の砂浜をのぞいて、大陸は見渡す限り十数丈もの絶壁に截断せつだんされている。中国には珍らしい臨海の情景である。断崖のふちに立って彼はため息をついた。西から東へ雲とともに移ろうあてなき行旅はここで終っていた。

旬日のうちに彼は付近の地理や民心をつぶさにみた上、ここに定住する決心をした。半年もすると、「徐先生」と町の人々から敬われて、医者とも薬屋とも分らぬ稼業に落着いた。東支那海にしがかる付近の岩礁はさまざまな魚貝や海草の残骸にとんでいる。すぐ北側の雲霧がまつわる山嶺の色合は、そこが多種多様な植物界であることを示していた。薬種の資源は手近かにあって潤沢なのだ。

武人だったらしいというだけで、彼の詳しい前半生はだれにもうかがい知れなかった。それでも、人々は侍医のような前身を想像した。この物静かな偉丈夫の指はしなやかで、長年てきぱきと仕事をやってのけ、鋭いがあたたかい眼差は多くの病苦を看とってきたように思えるのだ。およそ剣には無

縁な手と人柄の感じである。

医療はあっても医療はなく、専ら動植物のミイラを煮るしかない時代であった。『自然』に順じる原因療法にたずさわるためか、彼はしきりに「天然の」という語句を発した。薬種業と併せて彼はさやかな塾もひらくようになった。「政は人の心を治めず」「拓くは剣にてあらず」「天は人の手に壊すを命ぜず」といった意味のことをしきりに示唆した。

そういう時、彼の声と面差はただならぬ衝動に見まわれたように昂ぶるのだった。大人も塾に学ぶ子供も、徐先生の過去を、いまの彼の心境とは全くそぐわぬ条件にとりまかれたものに考えてみた。

二年後の秋の夕方、小さな寿が<sup>ことほぎ</sup>あった。ここにきて間もなくめとった若い妻が長男を生んだのだ。素直な心としなやかな体付の妻だった。葉をもぎ、薬研<sup>やげん</sup>を押すだけを天職としているような女なのだ。五十近くで初めてあやかる吉事は彼を狂喜させた。わななく腕で赤子を抱え、戸外へでた彼は一瞬、笑顔を消した。

「現世だ。しっかりして、そして、多幸をつかむんだぞ」

徐先生は波瀾をくぐった自分の感慨から思わず我子にこの言葉をはなむけた。戸外に吹く潮風は父には朔風とも、また微風とも感じられた。男児は福と名づけられ、仮の字名を<sup>ひつ</sup>蒔とされた。姓とあわせて、徐福<sup>じよふく</sup>の語意に父親は風波の立たぬ我子の処世を希ったのだ。なおこの先も乱世が引続くと思えぬ世情である。

「孔子でさえ、我が家をもたなかった。華やかな王者の奇運を<sup>たど</sup>迎るより、泥の床に<sup>ふ</sup>臥す方が人生は安心だ。福は徐やかに……」

不幸にも、若い母親はこの子と引きかえにその後間もなくみまかる羽目になった。短い間だが、磯で足を洗われ、深山に分け入る内助の功は、生来ひ弱な彼女にはかなり酷な生活の負担だったと思え

る。

嬰兒が三ヵ月になったある日、劍英は長男誕生の日と同じ姿勢で海風にふかれていた。嬰兒はしきりに父の双腕のなかで身をくねらせた。ふいに、父は軽く叫んだ。小さな足がその胸をけた。赤子の『脚力』とは思えない強い力であった。その瞬間、父は茫洋と海を見渡した。

ふいに父をおそったのは、漠然とだが、「この子は跳ぶ」という命題のような想念だった。それも、かつての彼のように隘路あいちうを木の葉が流れ行くのに似たさすらいではなく、何か、いっきに遠いはてへ行きつくかたちに思えた。

徐福は物心ものごころつくにつれて、この父を秀れた師しと思うようになった。父がよくこんな意味のことを彼に語ってきかせたのを覚えている。「ある植物の種子は、風や水の力で途方もなく遠くまで追いやられる。土質も周囲も初めの親許とは異った大地だ。彼らには初めからふるさとというものはない。というよりも、どんな土にもなじむよう命じられるのだ。生まれるなり、親のにおいをとり上げられる虫や草木は人間よりも強い。人もこうありたいものだ。また、着心地の悪い衣服は、さっさと脱ぎすてるのもよい」

これも幼い心にはただおぼろげな啓示であった。

だが、その後、思いだす度に、この教訓は重みを増した。彼の思想の核となるのである。

親にならって、彼も葉草採取に親しみた。父は、息子が思うままに未来をえらぶのを望んだが、どうしても幼少から博物界に目を向けさせがちになった。必らずしも親にならうことはない。家

業とは継ぐものではない、むしろ創めるものだ——と父は氣遣つて念をおした。福は草を抱えこみながら、父に微笑した。草いきれは彼の生理をくすぐった。

博物界のうちでもとりわけ、昆虫の営みは少年を魅した。その輝やく眼を見やうて、父はつぶやいた。

「せっかちに動き回る。だが、だまって、目を伏せて生きている輩だ。乱暴者はあつても、悪人はいない。そして……孤独だ」

やがて、少年は、世の中はどんな処か、としきりに尋ねるようになった。この無造作な質問に父は額に刃を当てられる心地になった。むしろ、父自身回答をださねばならない設問なのだ。

天下は何世紀も昔から統一を失っていた。国という言葉は一つのものではなく、戸惑うほど多数を意味した。手<sup>て</sup>んでに正義を唱えては、すぎあらば、弱く小さな者を併<sup>あ</sup>呑する貪婪<sup>どんらん</sup>で、騒々しい下界のながめだ。幼い心の手本となるものは、どこにも見当たらない。

「衆みだりに多し。世に佳景なし」と、父はかこつのであつた。

ある日、父子は山に分け入った。その折、父は朽ちた木株を斧で割って、息子の眼をいざなつた。彼なりの答え方である。

それは巨大な蟻の巢の断面であつた。そのひと抱えの木株すべてが白蟻でつまつた袋同様だつた。徐福はこの『数』にめまどつた。

いくつも階層があり、その通路や室房の組成は網目のように完璧である。彼はこの『家』に魂消<sup>たまげ</sup>た。あるいは、これは一つの『国』の俯瞰であつた。上の方に際立って大きな空隙があつた。こずみ

合つて蠢く全体を悠然と踏まえるような室房である。一匹の蟻が大きな胴を横たえて憩っている。

そこはあわただしい各階に比べて、ふしぎなほど静かな洞である。割られた直後なので、巢の断面から白い群集がこぼれ続けていた。みるみる地表に負傷者と死体が雪のように積もっていく。うでをくんだまま、父はあごで示した。

「これが政治だ。一人と多数」

そして、ちょっと思い直したふうに、

「お前の年には酷だったかな。いや、世の中は変りばえしない。早く知るのもよい」  
くらい父の顔が少年の心にくいこんだ。

福は奔放に体を動かす少年に生長していた。山野を鹿のようにかけ回って、たえず生ま傷にしごかれ、骨折の憂き目を数度もみた。自分の命名もどうやら的外れらしい、と父は苦笑した。

福の名は肉体の特徴を述べるようだ。

少年は肉袋のように肥えて、顔面はまるやかだった。福々しい、というと聞こえはいいが、戯画になるばかりに愛嬌があった。

『顔は平べったく、背は低く、だが、無病息災で……』

嬰兒の時に父が抱いた予測は、生長につれて的中してきたのである。

十三歳の時、盧生という同年の友人を得た。

盧生の父は遠く西方の国の高官であったが、事情があつて落魄の身をこの山東に寄せたのである。琅邪では有数の知識人であり、自分とよく似た身の上の徐劍英に早速、我子の勉学を頼んできた。

「同年の友こそ師です。息子たちは好奇心を高め、競って教えあうでしょう。あなたも私も、今日の制度に失望して世をあきらめました。この先の春秋はどうなるかわからないが、子供たちが見放すものであってほしくはない」

二人の父親は手を取りあった。

少年たちは、すぐに馬が合うというわけには行かなかった。

初対面の時、盧生は徐父子をむしろおずおずと見上げた。決して自分の方からは口を開きそうもない、いかにも内向的な氣質を思わせた。

徐福が注目したのは、その人並はずれた大きな眼である。伏せ気味で、茫洋としてみえるが、確実に一点を射ている瞳にちがいはなかった。

ところが、盧生の父はかなりの巨漢であった。やや肉うすくて血色が勝れない息子を庇うようにして、

「とうとうこの子は物心つかぬうちから流寓に明けくれる父につきあわされて不憫なことです。人生とは木の葉のようなものという悪い教育になってしまいました」

と、かこった。徐福はこの少年が笑顔をみせる場合を想像できなかった。何か初めから人生に対して居坐ってしまった感じだった。父親がいうように、世間が余りにもあわただしく彼の眼前にめくるめいたためかもしれない。ひやりとするほど大人びた落着きようが感じられた。

幼い者には早くから友をあてがう。自分以外の現実を知り、他人との調和の妙を学ぶため……とは、父劍英の信条である。が、この盧生は異種でありすぎるようだった。

しばらくつきあううちに、福はこの少年の従順な面に気づいた。盧生はおよそ対蹠的な氣質だが、福の親友となれる資質をそなえていた。

腕力ではとも角、盧生は勉学では決して愚鈍な少年ではなかった。徐劍英は二人を並べて講学を始めた。

何ヵ月かしてこんなことがあった。二人の学友は初めて連れだつて山へ分け入った。溪谷地帯にさしかかり、底部の不安定な大岩を伝つて進むのである。危ぶみながら辿つて行く盧生の脚は、たえず、先行の福を待たせた。ふいに行手が、崖ぶちになった個処にきた。福は苦もなくそこから跳びおりると、まだ上に突立っている友をうながした。

「跳ぶだけだ、速く」

その声は盧生を立ちすくませた。

「何をしている。わけないことだろう」

盧生は、かたくなにくびをふった。齒がゆそうに福は岩の凹みをさぐつて、岩壁を登ろうとした。すると、上の少年は足許の石をつかんで振上げ、真剣な面持で拒否を示すのである。徐福はあどずさつた。盧生はうしろの茂みへ一旦姿を没したが、まもなく傷だらけの手で葛の束をつかんで現われた。彼はそれを束ねて縄状に撚る仕草を始めた。合間に下へ声をかけた。

「ごめんよ、待ってくれ」

作業がすすめられた。徐福は石に腰かけて、無言のまま待った。葛をしごく気配がした。降りてくるなり拳骨をくらわそうという最初の昂ぶりはなえてしまった。葛のロープを伝つて、それも全身を托す感じで、丈余の高さから降り立った友を徐福はある感動をもって抱えとめた。

彼我の違いを決定的に認めたのはこの時である。この友から何かを学んだ気がした。

## 二 章

この頃の勉学風景は、数百年後以降の書齋とはおよそ趣きを異にする。書物の頁をそつとくるといふ風情ではない。机の一方に積上げられた竹簡を眼を通す尻から片方へ積み直していく。読書は力仕事であった。一枚には大きな文字が数行しか記されていない。竹版を重ねる音は「読みふける」心には耳障りだが、何か成果を築くりズムのようにも感じられる。室外の親たちはその音の多少と間合に、我が子が積む螢雪の功を読みとるのだった。

徐福は何日かに一度この竹の書物を焚木たきぎより多く背負って遠い処から運んだ。学は重かった。この重みはどれほど同じ向学者の間を経巡ったことだろう。黒ずんで、すえた竹のにおいにむれ、背を汗に浸して彼は考えた。

目下のあらゆる生きる手だて——衣食住、それに読むことまでが不備で無駄が多すぎる。文の伝達  
はなんとかかさ高く、力の要ることだろう。まったく『刻苦精励』の教育効果には充分だ。この世の生  
き心地はせいぜいこんなところか……と溜息とともにかこった。

それにこの小都市にあって夜を拓くこともひと苦労だった。効率の悪い魚油の灯はやたらに煤と異  
臭を吐いて、学びの部屋の内部を幽鬼がうずくまる巢のように照らしたものである。幽鬼である徐福  
はそれでも勉学に眼を輝やかせた。書物の多くは周朝の祭礼や経世や史学のものであった。そのほと  
んどは二十年後に竹の廢材として焼きつくされるのである。このうす明あかるさは幻想を催すのに手頃で  
あった。福は書物の内容に應じて、太古をしのび、そこに遊んだ。春秋戦国時代の逸話でいっぱい  
彼の脳裏には、城、戦車、甲冑、刀槍……が林立し、鼓や笛の音が高鳴ってにぎわった。権力のみを

楯とする王や宰相、国費を蚕食して媚と閨房の害毒を吐く美女、自然と領主に運命を托す農夫……彼はさまざまな顔を描き分けるのである。

自習は、こうした奔放な雑念で楽しい反面、苦行でもあった。古代の字画はいろいろな迷路の図柄となつて、彼をわずらわした。昼間、盧生と二人で父から授業をうけたあと、翌日の課程を予習するのである。こうしたところへ自分の予習をすませた盧生が、ふらりとやってきて、しばしば徐福の難渋を助けるのである。盧生が苦もなく解説してくれて納得できると、徐福は友の手をとって拝謝した。臆病な少年がわずかでも師にみえる時だった。赤黒い灯りのなかで青春は耐え続けた。

幻想は海上にも描けた。徐福は海岸で波に足を洗わせながら、沖の方を慕った。大昔からそこには蓬萊、瀛州、方丈、という神仙の住む三つの楽土があるといわれている。

……その住人はすべて真人の悟りを得て、俗界の支配も服従も相剋もなく、健康を享受している。人間の年齢はおよそ暦の意味でしかなく、老残の悲しみはない。血や涙のドラマは見るべくもない。植物の繁茂とそれから得る食物はすべて永遠の生命を叶える霊薬なのだ。この一切の鉱物は宝石で占められている。年中快晴で、ふんだんな泉はまた雨にも替る。紺碧と葉緑に映えて、人々は微笑の面差を変えることがない……。

伝説とも伝承ともつかぬこの事柄はいつごろ発生したものでだろう。

徐福は高齢の老人とみれば、熱心にこの仙境の話をつがんだ。だが、彼らの知識もこのあらし以上の詳細を付け加えられなかった。彼らの皮膚はたいいてい、やせて、あれていた。福の手で袖をつかまれると、しわだらけの顔をひしゃげ、水平線を指して、くびをかしげるのだった。この辺の生活では、塩からさが味のすべてであり、衣と住は身をおおうだけという粗雑さである。憔悴とあきらめの

なかでも彼らは沖に虹をかけている。長寿を保てば、人間は死後も蘇生できるといふ奇妙な信仰が伝わっていた。老人が長い間、飽きもせず、まずいものを食み、虫のように働き通して瘦軀そうこをさらす老残の苦痛もこの虹の前では何程のものでもない。来世には、滴したる緑と宝石の砂利の上に豊頬の仙人となつて降り立てよう……と。

この頃から数年もの間、海岸の砂浜にいつも同じ姿勢で坐つて沖の方を眺めている一人の老人があった。あたりはきめ細かな白砂の浜である。老人は一見、褐色の木像とも見えたが、近づいてみて、生きた人間と分ると、微動だにしないその居すまいには鬼氣迫るものがあった。寄せ波のふちがそのひざ頭にしたい寄っている。

老人の名は貨かといつて、何でも遠く西方から流れてきたもので、以前は一国の重要な人物だったが、当地にきてからは他人と口も利かず、このような不可解な徒勞に明け暮れているのであった。その奇態はとも角、しわと眼光のなかに感じられる一種の人品氣骨の趣きにおそれをなして、だれも近づきかねた。

気さくな徐福はこの老人にも『楽土』について尋ねてみた。老人の喉仏が上下した。しばらく息づまる沈黙のあと、奇人は両掌で白砂をすくい上げた。関節が際立った。惨憺たる指である。砂は顔の高さまで持上げるまでもなく、すっかりこぼれおちてしまった。老人はふたたび試みた。そして……逐次徒勞に終つた。性懲りもない無言の所作が徐福の眼を釘づけにした。

次の日、徐福はうしろから老人に昨日と同じ設問を試みた。蒼空の下で少年と朽木のような老人との間に前日と同じ応酬がくり返された。それにうなづくように波音だけが高かった。早速徐福は帰宅して父にこのことを語つた。

父はある感銘をうけた様子であった。

「さすが、貨先生らしい応え方だ。お前には分るか」

以後数年間、徐福は貨老人からついにひととも言も引出せずに終った。老人の仕草は人々の眼に兎戯ちや以上に単調な狂態としか映らなかつた。

町じゅうで父だけが老人の唯一の話し相手のようだった。そのうち、貨老人が西方の大国趙ちやうで宰相までつとめたが、故あって下野し、ちょうど盧生の父と似た辛酸のはてにここへ辿りついた事情が分つてきた。

ある朝方、貨老人は、いつもの坐り場所を寸分も違えずにうつ伏してこと切れていた。顔を海水に洗わせ、けりあげたかたちで硬ばった足の裏には白砂が載っていた。人々にまじって徐福はこのひとつまみの砂をまるで老人の遺訓のように眺めた。やせた指の間からこぼれる砂の光景がいまさらに胸に迫った。

巨漢の父が大粒の涙を見せるのを徐福は虚をつかれた思いで仰いだ。父は実父の死におとらぬ悲哀と盛大さで貨老人を弔らった。

父は故人を偲んで、つぶやいた。

「だれよりも努力した人であった。常に苦勞へ直角にぶつかっていく清廉の士なのだ。上の者の権威や機嫌に妥協せず、また、剣も貨幣も払いのけて進むしかない御仁だった。そしてもう精根つきはてたのだ。この世の砂をやせた掌ですくっては、徒勞に終った自分の一生をお前へ仄はなかしたものである。だが、先生は夢を持っていた。楽土渡海の幻想は人一倍強かった」

徐福は貨老人の肖像を父にも見出す気がした。父は、徐福がその遍歴について、さり気なく尋ねかけても、とたんに口をつぐんでしまうのである。福もはっとするほど、別人の父の顔がそこにあっ

た。

体力と奔放な気質から、徐福は周囲からたえず叱られ、苦情をよく浴びたが、父は徐福自身張合いがないくらいほとんど意に介さず、せいぜい頭をつかんでゆする程度であった。徐福がかなり成長した頃、父はその時もこの小さな譴責を振舞って、こうつぶやいた。

「この世のいたずらは子供だけのものではない。叱って済むものならまだいい」

石や棒切れで他人の頭にこぶを作るのは児戯といえる。だが、他人の生死や運命を変える大人の児戯は、笑殺できない。兵革は忌むべきだ……徐先生は二人の弟子へ説いた。

この中華の地は歴史こそ満身創夷だが、決して天然資源に乏しくはない。人間で荒廃しているのだ……、徐福は漠然とこう思った。

父は、いつも長い間、海岸に佇む人影となった。その袖をひいて帰宅をうながす徐福に父は不動のままつぶやくのだった。

「哲人の莊子は、この世は夢だといった。いや、眠って見る夢の方が案外現実かもしれない」

そんな時、真物の虹が陸と水平線にかかっていることがしばしばあった。現世の物欲を、とくに払いおとして、目下はほそぼそと生きながらえるだけの往時の武人は瞳を輝かせた。

琅邪からすこし北へ入ると博山という奇峰がある。山東の山々がどれも、肩をよせあっているなかで、この山岳だけが孤高な佇まいであった。山頂は地肌がむきだして、巖の多い果実のようだ。周朝の中頃から、これを模して博山炉という香炉が造られていた。それから立昇る濃い香煙は、博山上空の幻妙な卷雲をしのぼせる。博山の中腹に雲がまつわって、峰を浮かび上がらせる日が多い。雪を冠するほど高山ではないが、白い峰以上に霊峰というにふさわしい山容である。この山は地上の人間に